



旌桜 (瑞龍町)

水の思い出 ⑥8

一春の雨は大地に降り注ぎ、桜の花を咲かせる一

市内瑞龍町字旌野には、地元の人々から旌桜はたさくらと呼ばれる不思議な桜の木があります。種類は山桜おしべに属し、花は白く雄蕊の先



にまた一つ小さな花びらが旌を立てた様に見えるところから、その名があるようです。

昔「八幡太郎義家は、奥州の反乱を鎮定して凱旋の途中、この地に宿陣して兵馬を休息させた。その折、桜の木をとって旌竿とした。出発の際に、旗手は旌竿を残して去ってしまった。するとその竿の桜の木が根を出し、翌年の春に花を咲かせた。」と伝えられています。

この地は現在、旌桜寺跡として知られています。往時は白雲山旌桜寺という寺院があって、水戸藩二代藩主徳川光圀公は、この寺を度々訪れ観桜しています。西山荘に隠棲されてからは、毎年のように、人を誘っては、花見に旌桜寺を訪れたと言われています。

今私たちが目にしているこの旌桜は伝説の木から数えて三代目に当たるそうです。開花した全ての花が旌を備えているわけではありませんが、四方に張り出した枝が純白の花びらで覆われる頃、ぜひ皆さんもご家族やお友達を誘って「旌」を捜しに出かけてみませんか。

(原田 静雄)

加藤寛斎著

「常陸国北郡里程間数之記」尋ね歩き

Part
2
太田編

加藤寛斎著「常陸国北郡里程間数之記」をご紹介します。フォズ62号では金砂郷地区の絵図を取り上げましたが、今回は太田地区の絵図をご紹介します。現在の主要道路は江戸時代からほとんど変わらないことがよく解ります。「加藤寛斎」と「常陸国北郡里程間数之記」についての詳細は2012年9月発行フォズ62号をご参照ください。

(鴨志田弘子、高橋靖浩、原田静雄、武藤千絵子、五十嵐弘)

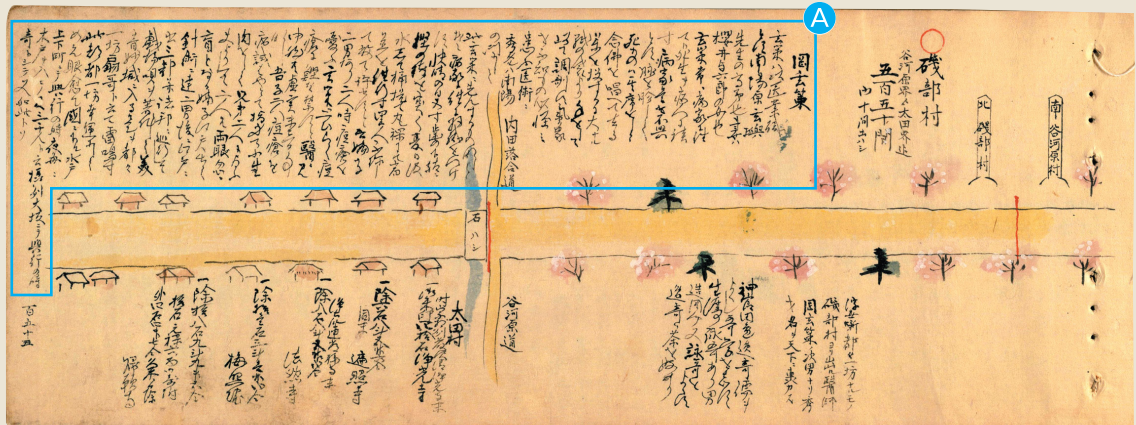
かとう かんさい
加藤寛斎 (1782年~1866年)

水戸藩の下級武士として水戸藩の行政区の一つ北郡奉行所に50年以上勤め、「常陸国北郡里程間数之記」と「加藤寛斎随筆」を残しました。

ひたちのくにほくぐん りてい けんすうのき
常陸国北郡里程間数之記

加藤寛斎が文化年間に役所勤めを始めてから50有余年の間に郡内各地を歩いて見聞きしたことがらを絵図等にまとめたものです。

6 磯部村と岡玄策



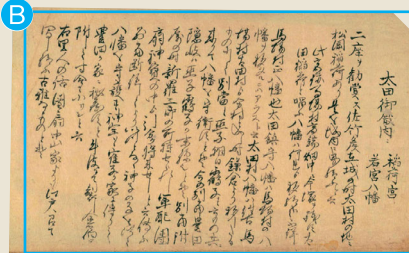
A 岡玄策は医業を職とし、水戸藩医師原南陽の高弟だった。妻は桜井与六郎の娘である。玄策は往診の時はいつも生死を病人に話す、病人宅ではこれを快く思わない、脈を診ながら死ぬ者にはその場で念仏を唱えて帰る。投薬時は大きな紙袋に手を入れて調剤する。医術を知らない者は極って怪しく思う。

医術に秀でており、原南陽が言うには「この玄策の先に出る者はいない」と、往診に羽織を着用せず、快晴の日には5寸歯の下駄をはき檜の棒をついて歩く、夏の日には汲水を手桶に抱え丸裸で宿並みを横行する、地元の人にとっては珍しくもない光景だが仕方ないものとしている、長男・次男とあり、ある時二人は痘瘡に罹る、玄策が言うには「痘瘡の患者に鰹を食べさせてはならない、と医術では云うが、嘘か真か未だ分からない事だ、我が子二人が痘瘡病に患ったので試してみよう」と死を覚悟で鰹の刺身を二人に与えた、これによって二人は忽ち両眼が盲目となってしまった。

後日、長男は江戸に出て針術をマスターした。次男もその後江戸に出て諸国を遊行し戯場唄を創作し唄った。その音声は民衆の心を捉える。これが都々逸坊扇歌で絶賛人気を呼んだ。都々逸坊は幸運にも眼病が治り生国に戻った。水戸上市・下市での興業時は観客が毎回3000人を数えた。又大阪での興業でも不思議と多くの観衆を集めたという。

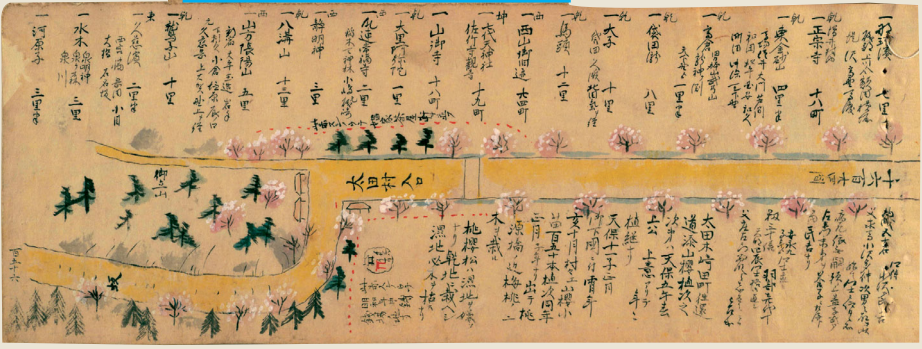
岡玄策の墓は市内稲木町の共同墓地内に現在も残っています。岡玄策の次男 都々逸坊は江戸で船遊亭船橋の弟子になり高座に上がり人気者になりましたが、社会情勢を非難したため1850年に江戸を追放されたといわれています。

7 太田村入口 太田御殿と太田の桜



太田御殿内に稲荷宮・若宮八幡二座を勧請した。佐竹侯が太田城に在城の頃、太田の地に松岡稲荷があり、これを城内に引き込んだと言われている。この松岡稲荷跡は馬場村高塚の畑の中に今その塚が残っている。太田稲荷と称される八幡は何処から移り来たのか不詳の馬場村正八幡である。

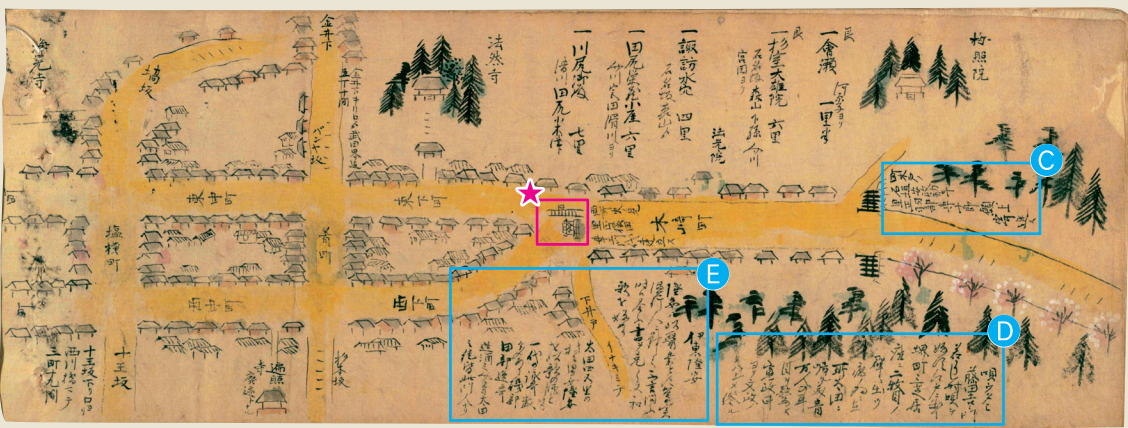
太田鎮守八幡は馬場村の八幡を移したのではないという。太田村八幡はその昔馬場村が太田村から分村となった折に、鎌倉から移した(分霊)もので、別当の巫女朝日鶴子(鶴岡八幡別当の巫女)という者が共に来常して八幡を守護したということだ。今の別当豊田隠岐は巫女鶴子の末孫ということだ。



(鎌倉で鶴子が)別当附属の時に、新羅三郎が所持していた軍配団扇神宝の中から引分けて持って来たと言い伝える。太田では別当が断絶してからも神子(神社管理者)の子をもって八幡を守護し、神宝も鶴子の家に伝わり豊田の家に秘蔵としてあるものだ。牛皮で造り金箔を塗って大きさを合わせたが小さいという。右は里人の話であり、団扇は中山家からも江戸へ差し出され、複製を作ったほどの古くて美しいものである。

(添書)水戸藩第9代藩主徳川斉昭卿は、天保4年(1883)に下国(水戸藩)され翌年春、瑞龍山墓地に参拝されました。東郡奉行山中何某と北軍奉行鈴木何某をお供に河合・磯部・太田の村々を往復され田町を通行され、道沿いに山桜を植えるようにと仰せになりました。上意があったので、翌天保6年春から山桜を東北に植樹しました。
※(添書):加藤寛斎は絵図に書ききれない事柄は添書に書き残していました。

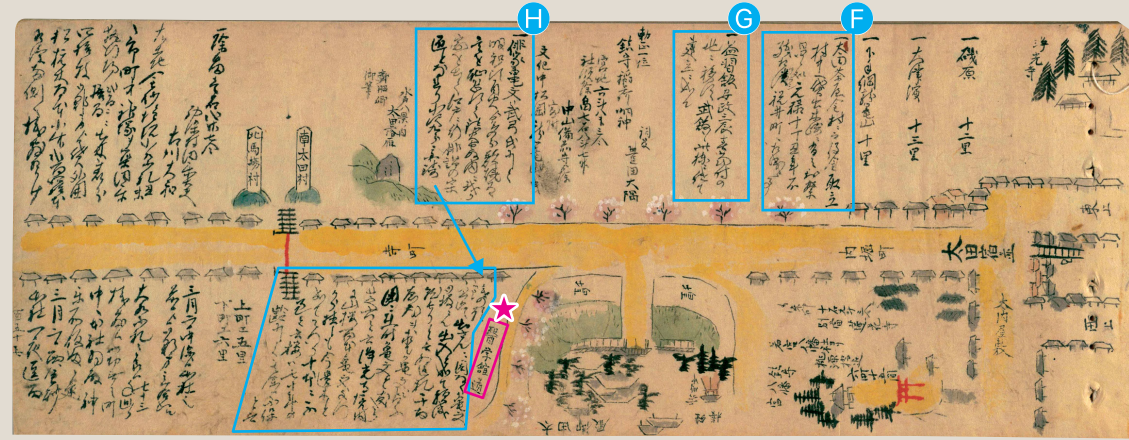
8 木崎町・東町・西町・塩横町



- C町木戸があり、石垣になっており「安政初年里正羽部専十郎願ノ上寄進」されたものと書いてある。
- D藤田吉衛門 唄を好て、江戸の堺町芝居座二枚目の役で人気もあったが病の為に在所太田に帰る成り、美音万人の耳目を驚かす、寛政中より文政のはじめに終わる。
- E伊東隆安 隆安は医業を生業とした。人となりは篤実温厚、尋ね事に答えられない者にも応答した。書を能くし和歌を好む、太田近隣の村々の男女は隆安を和歌の先生と仰ぐ、一生に詠んだ歌は沢山あり、磯部田邊逸奇造酒之介等の太田の輩は皆この隆安の門人である。

★下井戸坂の上、現在公園がある場所には以前消防署がありました。この絵図によると、江戸時代にはそこに火の見櫓が在ったようです。

9 内堀町と寺町



F 木崎にあった太田茶屋金村が「御役金取立、村中へ貸出」で繁盛したが元禄十年に潰れて祝井町へ移った。

G 益習館が安政三年辰に当地に移った。武道館も同じ建物に造築した。

H 俳人亀文は武弓氏で明和の頃、自宅より出火し類焼に及びこれを恥じ恐れて鎮火しないうちに自宅を去り江戸に逃れ、その後俳諧の宗匠となった。

小澤九郎兵衛は太田の地での鑄銭場経営に野心があり、その願書を水戸藩・幕府に提出した。一方江戸で俳諧の宗匠となった亀文は幕閣関係者との俳諧での接点を活用して九郎兵衛の願事が成就すべく支えたという。その甲斐あって鑄銭の願いは許可が下りた。その返礼として九郎兵衛は屋敷を求めこれを亀文に贈ったという。太田在住の時分、亀文は尾花庵という俳壇を介して九郎兵衛（俳号は芝六）と親友同士だった。

亀文は浄光寺境内に山桜 100 本を自ら植樹したが、今はその遺木 10 本ほどが残るという。桜の樹齢は約 70 年であり、その原景はないという。

(添書) この町木戸を境にして馬場村（太田界より瑞龍界まで四百二十一間）になるが、そのまますすぐ進むと鎮守八幡宮（現馬場八幡宮）につきあたるが、棚倉街道は右に折れて、真淵坂を下って北へ進む。

水戸藩 10 代徳川慶篤公様が初めて下国の時、太田御殿の造営を開始された。普請奉行は坂場与蔵である。程なくして御殿内から出火し塵と帰した。御殿の責任者が小沢庄五郎の代のことである。

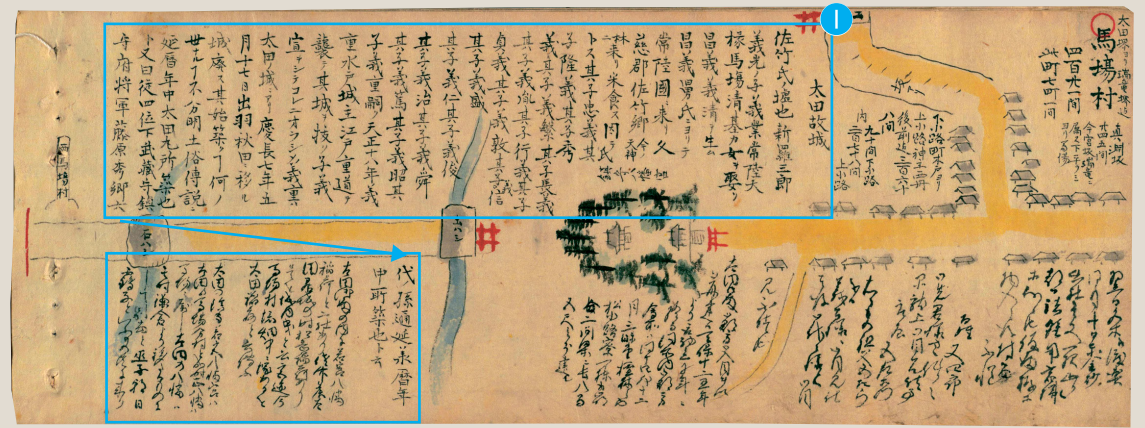
その後前の中納言徳川齊昭卿が入部された。郡奉行鈴木庄蔵の時に郡の物入りで今の場所に再建された。管理は普請方の特に郡方が労力した。御殿地内の郡会所一棟は三味堂壇林（僧侶の学校）の松小路寮を取壊しの際の古材を投入し建立した。

★益習館は天保 8 年 9 月に水戸藩郷校として開設されました。当時は医学館と呼ばれていたようです。絵図にも「医学館道」という道があります。



①～⑤は2012年9月発行フォンス62号をご参照ください

10 馬場村と太田故城



1 太田故城

佐竹氏の城である。新羅三郎源義光の子義業は常陸大掾馬場清基の娘を娶り、昌義・義清をもうけた。昌義は舅馬場氏の助力を受け京より来常した。久慈郡佐竹郷（今の天神林に）に入った。佐竹郷と称する荘園に因んで佐竹氏とした。其子忠義、其子隆義、其子秀義、其子義繁、其子長義、其子義胤、其子行義、其子貞義、其子義敦、其子義信、其子義盛、其子義仁、其子義俊、其子義治、其子義舜、其子義篤、其子義昭、其子義重が継ぐ。

天正 18 年（1790）義重は水戸城主江戸重道を襲って城を奪い、その子義宣をして水戸城を管理させ、自分は太田城に住んだ。

慶長 7 年（1602）5 月 17 日、出羽国秋田に国替えとなり廃城した。太田城がいつ頃築かれたのかは明らかでない、土地の伝説では延暦年中（782-805）太田 9 か所に築かれたと言い伝わる。又従四位下武蔵守鎮守府將軍藤原秀郷 6 代の孫に当たる通延が承暦年中（1077-1080）に築いたとも言伝わる。

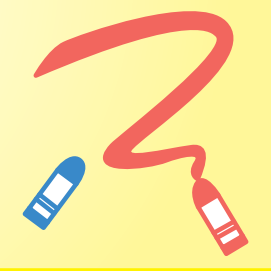
太田御殿の境内に若宮八幡・稲荷と 2 社がある。佐竹侯太田に居城の時に、松岡稲荷はあり、これを太田城内に引き移したという。今稲荷宮の跡は馬場村境の畑中に塚があって太田稲荷と言伝わる。

太田の別当若宮八幡宮は太田村から馬場村が分村になった時、正八幡は馬場村に祭られてあり、太田の八幡は鎌倉（鶴岡八幡）より分祠したものであって、別当と巫女朝日鶴子という人物が来常し、八幡を守護した。

私の10年エピソード募集

常陸太田市は、今年合併して10年目を迎えます。フォンスでは秋に発行予定の72号で10周年特集を予定しています。グループやサークルを結成してちょうど今年で10周年目ですとか、合併の年・平成16年生まれのお子さん、結婚して10年目、常陸太田での10年にまつわるみなさまのエピソードや物語を大募集します。情報をお寄せください。

■応募や情報提供はこちらまで
フォンス・ネットワーク事務局 常陸太田市生涯学習センター内
TEL:0294(72)8888 FAX:0294(72)8880
Mail:shogaku-c1@city.hitachiota.lg.jp



広告

百姓母ちゃん農日記 14 最終回
もんぺ使い

『農からの発信の原点として』

農と日常がだんだんと遠くなっている今の日本の生活の中で、私の発信する農的エピソードが少しでも多くの人に心に留まってくれたらと思い書き続けて来た。私自身も農業とは遠い環境に生まれ育ち、それがたまたま農の世界に足を踏み入れ、だんだんとその面白さにはまり、ついには百姓母ちゃんライブを紹介するまでに至った。

農業を通じて私が一番好きになったことは食べること。こんなに私を喰いしん坊にさせた、畑のできる美味しいものたち。あらゆる食の基本となる、米、野菜、大豆、麦等を作り、食べ、売る中で、身に染みて思う自分で作ることの大切さと大変さ。忙しい農家生活の中でも、手間ひまかけて作る食の美味しさ、楽しさを伝えてゆくことは必要だなという思いに駆られた。筆をとり、発信してゆくことは、農家人口が減ってゆく今の時代、

大事なことなのだと思う。

朝みそ汁に入れる野菜を切りながらそれを作るお百姓さんのことを思ってほしい。

お昼のコンビニ弁当を食べながらでも、その食材がどこから来るのかを考えてほしい。

いつも通る風景の中に、田んぼや畑があったら、それらは当たり前じゃなくて農業する人が作っている風景なんだということを思い出してほしい。

今まで書いてきて、大ぜいの人から感想や応援を頂き、それが私の原動力になってきました。今まで読んで頂いた皆様、本当にありがとうございました。

(布施 美木)



子育て奮闘記

踊るママパラダイス 66 最終回

おふくろと呼ばれるのもイヤかも

2000年6月26日。その日はフォンスが創刊された日です。実に14年近くこのコラムを書かせていただけてきました。私はあまり自分の書いた物を読み返す事はないのですが、改めて第1回から読み返してみました。

子どもの手を引いて歩いてた自分。ママと呼ばれていた自分。自分の存在意義に悩んでいた。途中、泣いたり怒ったり笑ったり。かつての自分を省みることができました。1回目は私を名前前で呼んで下さい、という文章でした。嫁いだ時「織田さんのお嫁さん」、子どもを産んでからは「スミレちゃんのママ」。私って誰なの？と悩んだ時期もあると書いてありました。あれから14年たって、あの時の気持ちは今でも忘れないです。その一方でタイムマシンがあったら、あの時の自分に言ってあげたいことがあります。「大丈夫。」

悩んで泣いて笑って。その一瞬の積み重ねが今の自分になっています。もちろん、完璧な、なりたがった自分ではないけれど子ども達も大きくなって「ああ、いい子に育ったな。」と思ったとき、ピンチがあってもやってきた自分が確かに存在したのだと感じます。だから、大丈夫。

今、子育て真っ最中のお母さん達。子どもが大きくなっても悩みや心配事は減らないし、ましてや今度は自分が歳をとることの心配が増えますが、その子どもに育てられる自分を感じられればきっと大丈夫。あなたは、とても大切な存在だし、しっかりと地に足を付けて立ってられる子どもたちの故郷になれます。

私も、独り立ちしたスミレ、周囲の人たちに支えられ元気に仕事に行くコースケ、青春中のコキノをまだまだ心配していく予定です。あと何年かしたら「〇〇ちゃんのお婆ちゃん」と呼ばれるかもしれません。その時はどや顔で「はい。」と返事する予定です。

今まで読んでくださった全ての人達に深く感謝いたします。これからも頑張って行きましょう。ありがとうございました。

— わいわいネット 織田 裕子 —



リレーエッセイ **「思い出の絵本」** 『おやすみなさい フランシス』

～68～

(谷河原町 市毛誉夫)

わたしが子どもの頃、夜、眠りにつこうとするのですが何だか気持ちが落ち着かず、なかなか寝つけなかった記憶があります。天井の木目が人の顔に見えたり、襖の隙間から何かが出て来るんじゃないかと考えたりして、まだ起きている両親のところへ行っては何かと理由を付けて寝たがらないのです。思い当たる方も少なくないと思います。

そんなわたしにとって思い出深い絵本は「おやすみなさい フランシス」です。絵は「しろいうさぎとくろいうさぎ」で有名なガース・ウィリアムズの柔らかい鉛筆画です。

あなぐまのフランシスはベッドに入りますがなかなか眠れません。部屋の隅にトラがいるのではと考えたり、椅子にかかったガウンが大男に見えたり、風が揺らすカーテンが不気味…と、その度に親のもとへ行き、ベッドに戻る、を繰り返します。子どもの寝つけない時の心情がリアルに表現されています。きっとこの絵本、フランシスに共感できて好きになったのだと思います。

大人になってあらためて読み返したとき、威厳を示しつつもフランシスを優しく諭すお父さんの存在に興味を引かれました。「トラなんているわけない」と頭ごなしに言ったり、「それは大男じゃなくてガウンだよ」などと安易に答えたりせず、不安に思うフランシスの気持ちをしっかりと受け止めて、子ども自身に筋道立てて推論させることで思考力を育てているところが教訓的です。お父さんは「風にはカーテンを揺らす仕事がある」と言います。やがてフランシスは窓ガラスに当たる蛾について「窓をバタンと言わずのが蛾の仕事で、わたしの仕事は眠ること」と自分に言い聞かせながら寝るのです。

絵本でのフランシスのお仕事は眠ることですが、子どもにとって最も大切な「仕事」は親に愛されること。きっと子どもは単に不安で眠れないだけではなく、親の愛を確かめて安心感を得たいのかもしれないかもしれません。わたしもそうだったのだろう、と今思います。



人種会 5

「娘きたか」これは、里美地区小菅町のKさんのお宅で昔から作り続けられている小豆です。普通の小豆は濃い赤色をしています、この小豆は濃いえんじ色の中に黒い斑模様の入った見たことのない小豆です。名前の由来は、皮が薄く煮えやすい事もあり、嫁に行った娘が里帰りした時でも、用意してすぐに煮える事からついた名前だそうです。昔、お正月には七輪と大きな鍋でこの豆を煮て、餡子や羊羹を作ったそうです。「餡にしても、めんね



娘きたか



娘きた

えで（減らないで）良い、小豆は一度茹でこぼす」と言っていたそうです。Kさんのお宅では、この餡であんび餅を作ったり、紅白鏡餅も作ったそうです。あんび餅とは餅の中に餡子を入れたもの、紅白鏡餅は鏡餅の上の段が赤い鏡餅です、白で餅をつくとき、柔らかくゆでた小豆も一緒に入れてついたそうです。また、15日には、固めにゆでた小豆をご飯と一緒に煮て小豆粥を作ったり、色々な料理に使われていました。「娘きた」も里美地区大中町で作られていた赤と白の入り混じった綺麗な小豆です。田んぼの畦に植えた換金作物だったそうです。もう一種類「娘きたか」と呼ばれていた、灰色に黒の線が入った小豆があったそうです。「だに小豆」とも呼ばれていたそうです。作っている方がいましたら情報をお寄せください。
(白石 百合乃)

常陸太田の地名話 ～14～

さとと里野宮 【常陸太田市佐都地区】
さとのみや 【常陸太田市里野宮町】

なるかも」と言ったことから、佐都（さつ）と名付けられたといわれている。また、土雲をよく殺したという意味で殺（さつ）と名付けられ、変じて佐都（さつ）になったともいわれている。里野宮の「里（さと）」は薩都（さつ）がなまって「里」になったようだ。「里野宮」とは「里の神社」つまり風土記に出てくる「薩都神社」のことといわれている。
(川松 博)

<参考文献> 「常陸国風土記」「茨城県地名大辞典」「常陸太田市史 通史編」「常陸太田の史跡と伝説」

「常陸国風土記」に出てくる薩都の里には、土雲（つちくも）という原住民がいて、兎上命（うなかみのみこと）が兵を伴って土雲を滅ぼした。命はよく平定できたことを喜び、「幸（さち）



薩都神社

新太田点描 ⑥

画師・宇佐美太奇

宇佐美太奇は江戸時代の中頃から幕末にかけて、地元太田地方のみならず常陸国内を遊歴した画師である。寛政六年（一七九四）太田在の小目村に生まれ、明治五年（一八七二）に七十九歳で没した。当時としては比較的長命であった。

ところで、画師として太奇の修業履歴はズッと不明であったが、近年になって小泉檀山の門人録にその名を見出すことができた。太奇の項だけを左に紹介する。

文化四年入門

・太奇堂 名龍 字君美 水戸小目村人

介者栗原 宇野禎助

宇佐美善治郎改重十郎称

・太奇堂 氏ハ宇佐美 名無雅 字子文

号太奇堂称善治郎 久慈郡小目

里人也 文化十口口日宇野禎助

以書翰介之

この門人録によれば、文化四年（一八〇七）の入門で、これは太奇が十四歳のときである。その後、一時修業を止めていたが、文化十年（一八三三）に再度入門している。両度とも入門の紹介者はやはり太田在栗原村の宇野禎助となっているが、門人録には記載がないので同門先輩の画師ではなかったであろう。

ここでチョットと、太奇の師匠となった小泉檀山について紹介しておこう。檀山は下野国黒羽

藩の祀官であったが、若くして水戸の彰考館総裁立原翠軒の塾に学び彰考館にも出入りしていたこともある。郷里に帰ってから黒羽藩御用画師となり鮎画の名手として著名であった。それゆえ常陸国内や水戸領からの門人は太奇を含めて十数人ほどいたことが門人録から読み取れる。

さて、現在残されている太奇の作品であるが、その作風や画題は山水、花鳥、人物、動物等多岐にわたっている。六曲一隻屏風の大作から、茶室の小床に掛けて楽しむような小点ものまで様式はバラエティに富んでいる。なかでも商家や農家からの注文が多かったのだろうか恵比寿・大黒の掛軸画はよく見かける。また常陸国内の名所・旧跡等を写実的に描いた真景画も数点ほど確認されている。特異なものとしては同郷の本草学者木内玄節が全国各地で採取した薬草類のさく葉（押し葉）標本を、色褪せぬうちに写し取るなどして「草木形状録」の編さんに協力していることである。（本草学者、木内玄節については別の機会に紹介したい）

ところで太奇は、師匠の檀山が多くの門弟を養成したように、やはり自身が門弟を育成している。市内塙町の浄光寺に眠る太奇の墓には門人十名の名前が刻まれている。なかでも小林寒林（高萩市）や野沢白華（常陸大宮市）等は明治期の画壇に彩りを添えている。

太奇の息子竹城と娘奇玉の両名もまた画家として修業をしたが、竹城は明治維新後に水戸に出て雷神さん前で写真館を開業し、県内における営業写真館の草分け的存在となっている。このため竹城の絵画作品はほんの数点しか確認さ

れていない。一方、娘奇玉は父に先立つこと明治元年（一八六八）に二十六歳で死亡しているのので、これまた遺作は殆ど見られない。

さて左の真景図であるが、これは天保四年（一八三三）十二月、太奇が四十歳の時に麻生村住の羽生翁と羽生家裏手の明神山に登り、筑波山と霞ヶ浦を描いたものである。このとき太奇は「地球は丸い」と云うことを意識していたのかナァ。

（吉成英文）

